正徹の自筆懐紙・短冊拾遺（その二）

稲田利徳

本誌第九十四号（昭和五十七年六月刊行）に「正徹の自筆懐紙・短冊拾遺（その一）」として、自筆懐紙九枚と自筆短冊六枚とを紹介した。今回は、前回の後を受けて、その後の売立目録類の調査によって知りえたものを紹介したい。

なお、歌番号は『私家集大成中世Ⅲ』所収の正徹の和歌関係資料による。また、正徹の既知の和歌資料といった場合は、「草根集」のほかに、「永享五年詠草」「永享六年詠草」「永享九年詠草」「月草」「恋歌一軸」などはじめ、拙著『正徹の研究中世歌人研究』の詠歌資料集成に含まれている和歌のすべてを指していることは、前回と同様である（懐紙・短冊類の表記は目録類のそれによる）。

○懐紙関係

(1)徹書記三首懐紙

詠三首和謌　　正徹

夕春雨

①ゆふかすみまきの戸とちて
　ふる雨におつるもみえぬ
　軒のたま水

名所花

②あらし山はなハよしのゝ
　故郷にかへらぬ雲の
　にしきたつらん

祈身戀

③いのちをそなかくといのる
　逢ことにかふるはかりの
　身とはしらねと

この懐紙は昭和五年十二月の『某家所藏品入札』目録（大阪美術倶楽部）に写真版として掲載されているものである（以下、すべて写真版による）。まさしく正徹の真筆である。①②③の三首とも、正徹の既知の和歌資料にみいだせない新出歌である。

(2)徹正記懐紙

詠春朝山和謌　　正徹

④花の色にいつる
　朝日のうすくもりひ
　かりそにほふをち

近の山

この懐紙は昭和六年十二月の『當市小橋屋平井氏所蔵品入札』目録（京都美術倶楽部）に掲載されているもの。正徹の真筆と認めてよい。④の歌は「草根集」巻四（二六二七）の歌と同一歌とみてよいが、「草根集」の方は歌題が「山霞」、初句が「春の色に」と異文がある。「春朝山」の歌題で詠ずるとき「春の色に」を「花の色に」に意識的に改めたのかもしれない（逆のケースも考えられるが）。

(3)徹書記和歌懐紙

詠三首和哥　　正徹

閑庭薄風

⑤むらすゝきなひくハかりや
それならむあさ露おちぬ
庭の秋かせ

外山夕鹿

⑥なくしかのおもひの色や
まさきはふ外山の暮の
松の下柴

後朝増懋

⑦わけゆけハぬれそふ袖そ
そめまさる別路におふる
くすの葉の露

この懐紙は、昭和九年十二月の『翠樹園山田家所蔵品入札』目録（東京美術倶楽部）に掲載されているもの。正徹の真筆とみてよい。三首のうち、⑤⑦の歌は既知の正徹の和歌資料にはみえない新出歌であるが、⑥は「草根集」の巻九（七〇二〇）の宝徳三年七月十七日の条の「上総介の家の會に」の三首のうちの一首と一致する。相互に異文はない。

(4)徹書記詠艸

叢間螢　　正徹

⑧夏草を春のやけ野のになしわひて
もゆるほたるそ影あを見行

この懐紙は、昭和十一年四月の『某家所蔵品入札目録』（大阪美術倶楽部）に掲載されているもの。正徹の真筆とみてよい。この歌は懐紙の右側によせて書写してあり、左の三分の二は余白となっている。⑧の歌は正徹の既知の和歌資料にみえない新出歌である。

(5)僧正徹和歌二首詠草

暁山　　正徹

⑨旅ねする枕の夢のうき橋も
遠山かつらかけはなれつゝ

夕野

⑩山のはを尋かねてやむさし野ゝ
ゆふ目にかかる遠のしら雲

この懐紙は、昭和五十四年六月の『思文閣墨蹟資料目録』（第九十号）に掲載されているもの。二首の和歌は懐紙の右側によせて書写してあり、左側の三分の二は余白となっている。一見すると、正徹の真筆と少しかけはなれているような感じも受けるが、それは速筆

による運筆からくるもので、「正徹」という署名などからみても真筆と認めてよいと思う。⑨⑩の二首ともに、正徹の既知の和歌資料にみえない新出歌である。

(6)正徹自筆和歌懐紙

霰　　正徹

⑪いくたひかをとハあられの玉たすき
　おもふにちかふ雪けなるらむ

鹿

⑫さをしかのちきり外山の秋かけて
　かはるまさ木の色うらむらん

冬月

⑬氷しく霜夜の月につく鐘の
　こゑや千里のほかの明ほの

神祇

⑭いにしへの我父母そ神となる
　この世にすくへめくりあひにき

この懐紙は、昭和五十四年二月の『日本の自筆本』（弘文荘古書販売目録）に掲載されているもの。目録解説では「文字に老蒼の色があり、よくこの孤高の詩人の性格が現われて居る。」とするが、一見すると、これまでの正徹の真筆とは運筆が相違するような感じを受ける。しかし、これも、先の(5)の懐紙と同様、非常な速筆で書き流した形跡があるので、目録のいうように正徹の真筆とみてよいかもしれない。

この四首は、目録の解説もすでに指摘しているように、「草根集」巻一にある「侍日吉社宝前詠百首和歌」（享徳二年三月）にすべてみえるものである。但し、歌順は若干相違し、⑪＝一一一、⑫＝一〇九五、⑬＝一一一〇、⑭＝一一五三と各々一致する。

異文関係をみると、⑪の四句「おもふにちかふ」は、丹鶴本では「思ふに近き」と相違するが、『私家集大成』とは異同がない。また、⑫の二句「ちきり外山の」が、丹鶴本では「契外山か」と相違するが、『私家集大成』とは異同がない。逆に、⑫の四句「かはるまさ木の」は『私家集大成』は「かはるまかきの」と相違するが、丹鶴本は懐紙本文と同じである。

この懐紙と「侍日吉社宝前詠百首和歌」との関係であるが、おそらく、百首和歌の中から、任意にこの四首を選んで記したものと考えてよいであろう。これに似たケースは、拙著『正徹の研究中世歌人研究』でも紹介した、奈良市春日大社蔵「春日御法楽詠百首中五首和謌」懐紙にもみえる。この五首は「草根集」巻一にある「侍春日社宝前詠百首和歌」から任意に、春歌二首、夏歌一首、秋歌二首を撰抄したものである。

○短冊関係

(1)徹書記短冊

①落　花　ちらはちれおしまし花よ世の中の
　こゝろまかせになきハくるしき　正徹

この短冊は昭和三年三月の『縣下領下遠藤隨時庵氏所藏品賣立目録』（岐阜誓願寺）に掲載のもの。正徹の真筆とみてよい。①の歌は、「草根集」巻一の「侍春日社宝前詠百首和歌」（宝徳三年四月）のうちの一首と一致する（九二二）。相互に異文はない。

(2)徹書記自詠短冊

②雲外鴈　初しくれあまとふ鴈の涙にも
　　そめぬゆふへの雲そ色つく　正徹

この短冊は、昭和三年十月の『四日市々九鬼翠壽園主所藏品』目録（名古屋美術倶楽部）に掲載されているもの。正徹の真筆とみてよい。②の歌は、「草根集」巻五（三七四五）に同一歌がある。相互に異文はない。

(3)徹書記短冊

③卯　花　一こゑに身をやは捨むほとゝきす
　　う月の花の雪の山人　正徹

この懐紙は、昭和六年三月の『某家御所藏品入札』目録（大阪美術倶楽部）に掲載のもの。正徹の真筆とみてよい。③の歌は、嘉吉三年二月十日に開催された「前摂政家歌合」（続群書類従巻四一〇）の四十八番右の正徹の歌と一致する。左歌は、定衡の「たちかふるならひもさすかつからし花のかとりの衣也せは」で、正徹の歌は、「右は雪山の童子半偈の爲に身を捨る心、ほとゝきすの一聲におもひよせたる、めつらしきにつきて勝侍りなんかし。但千載集に俊頼歌に、なとてかく思ひそめけんほとゝきすゆきのみ山の法の聲かはと侍るに、面影にかよひ侍れは、いかゝとおほえ侍れと、狐白裘をぬすむといふ事は、詩家の法にも侍れは、さのみこそ侍らめ。」と判定され勝となっている。相互に異文はないが、歌合では「初夏」の歌題のもとで提出されているのに対し、短冊では「卯花」と相違する。これは元来、「卯花」の歌題で詠じていたものを、「初夏」という歌題歌としても不都合でないので、歌合に提出したものかもしれない。「前摂政家歌合」の正徹の歌が、自筆短冊でみいだせたのは、はじめてのことで珍しい。

(4)徹書記短冊

④炉　見てもうき秋やハ人にわすられん
　　昔の月の夜さむともかな　正徹

この短冊は、昭和六年五月の『尾州中島郡大角家市内東区掃秋居所藏品賣立』目録（名古屋美術倶楽部）に掲載されているもの。正徹の真筆とみてよい。④の歌は、正徹の既知の和歌資料にみえない新出歌である。

(5)徹書記短冊

⑤心静　しつかなる心に身をはやとすまに
　　延壽　いく世の月のかけめくるらん　正徹

この短冊は、昭和七年六月『西枇杷島町川島家並三市内某旧家所藏品賣立』目録（名古屋美術倶楽部）に掲載されているもの。正徹の真筆とみてよい。⑤の歌は、「草根集」巻十三（一〇一〇二）の長禄元年十二月十三日の条の「恩徳院歌合に」の三首のうちの一首と一致する。相互に異文はない。

(6)徹書記短冊

⑥閃中燈　くらくなり又あかくなる灯の
　　消まく近く夜ハふかくして　正徹

この短冊は、昭和七年十月の『某内田家家所藏品入札』目録（東京美術倶楽部）に掲載されているもの。正徹の真筆とみてよい。⑥の歌は、「草根集」巻六（五〇八一）の歌と一致する。第四句の「消まく近

く」が「草根集」では「きえまくちかき」と異文がある。

(7)徹正記短冊

⑦春　月　久堅の月のかつらももえいつる
　　若葉のかけや猶かすむらん　正徹

この短冊は、昭和九年十一月の『原尚爲氏所藏品入札』目録（大阪美術倶楽部）に掲載されているもの。正徹の真筆と認めてよい。⑦の歌は、「草根集」巻一の「住吉法楽詠百首和歌」（永享十二年三月）のうちの一首と一致する（六一七）。相互に異文はない。

(8)徹書記短冊

⑧嶺　月　浪の上のあわとそうかふ淡路かた
　　むかふいこまのみねの月影　正徹

この短冊は、昭和十三年十二月の『閑楽庵所藏品展観目録』（大阪美術倶楽部）に掲載されているもの。正徹の真筆とみてよい。⑧の歌は、先の⑦の歌と同じく、「草根集」巻一の「住吉法楽詠百首和歌」（永享十二年三月）のうちの一首と一致する（六五五）。相互に異文はない。

以上、自筆懐紙六枚と自筆短冊八枚を紹介してきた。自筆懐紙の歌十四首のうち、正徹の既知の和歌資料にみえない歌は八首、自筆短冊八首のうちでは一首、あわせて九首が新出歌であった。

これまでは、和歌懐紙・短冊に限って紹介してきたが、最後に、正徹の自筆消息一通がみつかったので追加しておく。正徹の自筆消息は、拙著『正徹の研究中世歌人研究』では、広島大学文学部国史研究室蔵書状、今治市の河野信一記念館蔵書状、それに『日本書流全史』（小松茂美氏著）に紹介の、不二文庫蔵書状、波多野幸彦氏蔵書状の四通を紹介しておいた。

ここに、大正十三年四月の『穢翠亭神戸家所蔵品売立』目録（名古屋美術倶楽部）に、「徹書記消息　眞珠庵添状了音極」として一通がみえる。非常に小さな写真版であるうえ、不鮮明なところ、判読不能の文字もあり、はなはだ心もとないが、一応、次のように解読してみた（なお、不鮮明な所や判読不能の文字は空白にしておいた）。

不寄存不思代ゝ在所
先借出候之次第ニ候
此間之在所地主との
式を□候程ニ御しかけ候とも
向後も同邊ニ令候間
任縁□御座所
遠さかり申候ん事
無念之事候兼又重
□一合拝領候様
所之式候間殊大切ニ
又賞翫無極候御
芳志之至毎度事候
難盡申候□夜ニ
人□候事難□申候

旁以面白可申候
恐々敬白
四月一日　正徹（花押）

書状の内容が今ひとつ判然としないところがあるが、これまでに紹介した四通の書状と比較してみても、正徹の自筆とみてよく、貴重なものである。

以上、拙著で紹介したもの、「正徹の自筆懐紙・短冊拾遺」（その一）（その二）で紹介したものを集計すると、懐紙は二十七枚、短冊は三十八枚、書状五通となる。室町期の在野歌人であって、これだけのものが残っていることは、比較的恵まれているとみてよい。正徹の歌や筆跡が人々に珍重されたことのあかしでもある。

今、私の手元には、疑存のあるものを除き、正徹の自筆懐紙・短冊の資料はない。しかし、今後も目録や手鑑その他に発見される可能性は充分ある。それらをある程度まとめて、（その三）として紹介するのは、遠い将来になるので、一応、（その二）で、しばらく一区切をつけておきたい。

なお、（その一）に誤植がかなりあったので、次に訂正しておきたい。

	誤	正
表紙	短冊捨遺	短冊拾遺
27・下	□□	（すべて、とりのぞく）
28・上	巻一	巻十一
28・下	及當地某家藏品 河内松田家藏品	河内松田家藏品 及當地某家藏品
29・上	招	招
31・上	ひもなき山	ひまなき山

―岡山大学助教授―